

## 地方都市と文化・観光・経済

鳥取大学特命教授  
野田 邦弘

わが国は2008年以降人口減少に転じた。高齢化率は26.7%（2015年）であり、人口減少と人口の高齢化が急速に進んでいる。また都市と地方間の人口動態としては、出生率が比較的高い地方からそれが相対的に低い都市部への若者の人口移動が続いている。増田レポート(2014)は、2040年までに全国約900の市町村が「消滅可能性」があるとし、センセーションを巻き起こした。このような状況をふまえて、政府は、2014年内閣官房内にまち・ひと・しごと創生本部を設置し、地方創生に本格的に取り組み始めた。民間も動き出した。例えば、日本財団は2016年度から5年間鳥取県と組んで県内の地域づくりを集中的に支援する共同プロジェクトを始めた。特定の助成財団が地方自治体とタッグを組む初の事例である。このプロジェクトでは都市から地方への人口移動（田園回帰）の促進が大きな目標となっている。

総体として、地方から都市への人口移動は続いているものの、逆に都市から地方への移住者は近年増加している。例えば、島根県邑南町など転出者を転入者が上回る自治体も生まれている。そして注目すべき点は、このような田園回帰の主役は若者であるということだ。従来田園回帰の主力はリタイアした中高年であると考えられてきた。しかしこの数年の地方移住者を見ると20代、30代の若者が中心となっていることがわかる。また、都市部住民の間で田園回帰志向が強まっているというデータもある（内閣府、2014）。

田園回帰のモデルと言われているのが島根県の離島海士町（人口約2300人）である。財政破綻直前まで悪化した町の財政を再建し、この11年間で約500人のIターン者を定住させることに成功している。また、廃校寸前だった島で唯一の高校である隠岐島前高校の再生を見事に成功させ、島外から若者が入学するまでになった（『未来を変えた島の学校』、2015）。クリエイティブ人材を集め、地域づくりを

成功させたのが徳島県神山町である。神奈川県相模原市の旧藤野町（人口約9000人）では、芸術家村づくりを30年以上継続してきた結果、約300人のアーティストが住むようになり、わが国初のシュタイナー学園が開校するなど地域にイノベーションを起こし続けてきた。

これらの地域では、クリエイティブ人材が集住し始めることにより、クリエイティブミリューが生まれ、そこでのアイデアの交換が文化生産だけでなく、新規ビジネスのスタートアップにつながったり、人々の間の新たなソーシャルキャピタルの形成などを誘発している。これらの小規模自治体の地域づくりに共通する要因とは何だろうか。

第一に、クリエイティブ人材や若者が「匂い」を嗅ぎつけて、交流（訪問）し始め、そのうち移住するようになる、というパターンである。そこにはきっちりとした計画がなくても「面白そうだから」というような理由で移住するいい意味での「無鉄砲さ」も見られる。鳥取県湯梨浜町のゲストハウスたみ周辺では、この3年間で20人を超える若者が移住してきた。ここには、たみ周辺で始まった様々な文化活動が地域にイノベーションを誘発していることが背景にある。第二に、移住者の間に見られる新しい価値観の芽生えである。筆者は、移住者の多いと言われる鳥取県に県外から移住してきた若者約20人にインタビューを行った。そこから浮かび上がる移住者像は、脱消費経済（ミニマリスト）、脱貨幣経済（贈与経済）、シェアリングエコノミーの傾向である。また、消費経済からの脱却は、一方でソーシャルキャピタル形成への強い意欲とも繋がっている。第三に、文化政策、経済政策、まちづくり政策など自治体政策が融合しており、いわば地域づくりが総合政策として取り組まれている点である。都道府県や大都市になると、対象住民の数が多くさらにその属性も多様なため、どうしても分野ごとに専門的な政策が求められるが、小規模自治体の場合は、政策融合的な取り組みが

可能であるし、そもそも役場のスタッフも限られているので、一人で何役もやらざるを得ない、という事情もある（欧州の文化政策では、文化的、経済的、社会的、環境的側面を総合的に捉えることが主流となっている）。

最後に、観光の側面を考えてみる。すでに述べたように、田園回帰は、地域の魅力に惹かれた人々が観光にやってくることから始まる。ユネスコは、美術館など地域の文化資源

を訪問する「文化観光」の時代から、観光客が地域住民とともに地域づくりを担う「クリエイティブツーリズム」の時代に入ったと述べている。地域固有の歴史や文化が尊重され保存されている地域、地域住民が風土に根ざした豊かな生活を送っている地域、住民が地域に愛着と誇りを持っている地域こそが、魅力的な観光地であり、クリエイティブ人材を魅惑するのではないだろうか。

**NEWS for Cultural Economics** .....

2017年

7月1・2日  
(土・日)

2017年度研究大会は、ホルトホール大分・大分県立芸術文化短期大学にて開催

**大会テーマは  
「まち・ひと・しごとの〈真の〉創生に向けて」**

2017年度文化経済学会<日本>研究大会は、7月1日(土)・2日(日)の二日間にわたり《6月30日(金)午後エクスカーションを実施》、大分県大分市にて開催します。会場はホルトホール大分(7月1日(土))、大分県立芸術文化短期大学(7月2日(日))となります。皆様の多数のご参加をお待ちしています。

2017年7月1日(土)ホルトホール大分(大分県大分市)	
9:30	受付開始(エントランス ロビー)
10:30~12:15	<b>分科会①</b> ① - A 伝統文化・芸能 (4F 会議室 404) ① - B 文化産業・クリエイティブ産業 (4F 会議室 405) ① - C 文化政策 (4F 会議室 408) ① - D まちづくり・地域再生① (4F 会議室 410)
12:15~13:30	ランチタイム(理事会 12:20-13:20)
13:30~15:30	<b>特別セッション I 《 3F 大会議室 》</b> <b>「アートと社会の交差点」</b> <b>【趣旨】</b> 近年、アートと社会との関係性が問われており、各地で展開されているアートプロジェクトや障害者の創作物の位置づけをめぐる議論も活発に行われている。 神野らが設立した「社会の芸術フォーラム」では、アートと社会の相互反映性を領域横断的に考察しており、神野は「アートをあらゆる人にひらかれたものとしようとする中で、アートそのものの特質が失われてしまっているのではないか」という問いを提起している。 秋葉らが紹介した「ソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)」は社会的相互行為なしには成立せず、他の分野との境界線を大きく超え公共圏に影響を与えるものだという。 福祉の領域に視点を転ずれば、表現活動によって障害者の社会包摂を具現化しようとする試みが各地で展開されている。たとえば障害者がやらざるを得ない情動に駆られた行為をアートと位置づけ、社会に発信することによって他者の価値観を揺さぶり、ともに生きる社会について人々が動き始めることをめざす実践もある。しかし、こうした取組をアートと位置づけることに疑問を呈する人々も存在する。

	<p>そこで本セッションでは、地域系アートや障害者アートの議論をふまえつつ、「アートはアートとしての特質を失わずに、社会との接点を持ち得るのだろうか？」という問いを多面的に検討する機会とする。</p> <p>【パネリスト】          神野真吾(千葉大学・准教授)          秋葉美知子(NPO法人アート&amp;ソサイエティ研究センター)          川井田祥子(鳥取大学・教授)</p> <p>【モデレーター】          八木 匡(同志社大学・教授)</p>
13:30～15:30	<p><b>特別セッションⅡ 《 1F 小ホール 》</b>          「都市祭礼文化におけるソーシャル・キャピタルと文化資本」</p> <p>【趣旨】          昨年12月に、本学会顧問の山田浩之氏編の『都市祭礼文化の継承と変容を考える：ソーシャル・キャピタルと文化資本』(ミネルヴァ書房)が刊行された。序章でも指摘されているとおり、都市祭礼は、これまで民俗学や社会学の視点から、その伝統のもつ意味などについての研究が進められてきたが、本書では近年注目されているソーシャル・キャピタルに加え、文化資本・文化的価値といった文化経済学独自の視点から、都市祭礼の運営組織や経済的基盤をも含めて総合的に分析することを試みたものであり、文化経済学のひとつの可能性を示すものである。本セッションでは、山田氏をはじめ本書の著者を招き文化経済学における都市文化・祭礼文化研究の到達点を会員間で共有したい。</p> <p>基調報告 山田浩之(京都大学・名誉教授)          三浦俊一(弘前大学・客員研究員)</p> <p>パネルディスカッション</p> <p>【パネリスト】石田信博(同志社大学・教授)          紅谷正勝(飛騨高山高校・教諭)          伊藤節子(京都大学・研究員)</p>
15:30～15:45	休憩・移動
15:45～17:45	<p><b>シンポジウム 《 3F 大会議室 》</b>          「地域文化と観光」</p> <p>【趣旨】          「地域文化と観光」と題し、ゲストに日本総合研究所の藻谷浩介氏、BEPPU PROJECT代表理事の山出淳也氏を招き、大分県芸術文化スポーツ振興財団の三浦宏樹氏の司会により議論を行う。</p> <p>別府の国際芸術祭「混浴温泉世界」で知られる山出氏は近時、2018年に大分県で開催される国民文化祭において、県内各地がリーディング事業として実施するカルチャーツーリズム(文化観光)の総合プロデュースを手がけている。『デフレの正体』や『里山資本主義』で著名な藻谷氏は、昨年末に刊行された近著『観光立国の正体』で、顧客視点に立った観光戦略・商品づくりというマーケティングを通じ、地域全体が豊かになることが持続可能な観光の鍵だと述べている。</p> <p>お二人の議論を通じて、地域の芸術文化・観光事業における現状と課題、そして今後の展望を検討する。</p>

	<b>【パネリスト】</b> 藻谷浩介((株)日本総合研究所・主席研究員) 山出淳也(NPO 法人 BEPPU PROJECT・代表理事) <b>【モデレーター】</b> 三浦宏樹(大分県芸術文化スポーツ振興財団・参与)
17:45～18:00	移動
18:00～20:00	懇親会 会場 1F 小ホール

2017年7月2日(日)大分県立芸術文化短期大学 人文棟	
9:00	受付開始
10:00～12:20	<b>分科会②</b> ② - A 観光・景観・地域 (人文棟 1F 101 教室) ② - B スポーツ (人文棟 1F 102 教室) ② - C 文化統計・計量分析 (人文棟 1F 視聴覚室) ② - D アートプロジェクト (人文棟 1F 大講義室)
12:20～13:20	ランチタイム
13:20～14:00	総会 《 人文棟 1F 大講義室 》
14:10～15:20	<b>分科会③</b> ③ - A コミュニティ (人文棟 1F 101 教室) ③ - B まちづくり・地域再生② (人文棟 1F 102 教室) ③ - C 理論・思想 (人文棟 1F 視聴覚室)
	会員企画セッション「公共劇場の就労環境改善を考える」(人文棟 1F 大講義室)

## ■会場

本大会は初日と2日目で会場が異なります。初日7月1日(土)はホルトホール大分、2日目は大分県立芸術文化短期大学の2会場での開催となります。初日ホルトホール大分では、午前の分科会をはじめ、午後の特別セッションとシンポジウム、懇親会と続きます。会場割当については、

下記の表でご確認ください。

7月2日(日)大分県立芸術文化短期大学では、会場は人文棟101教室、102教室、視聴覚室、大講義室となっております。発表会場となる4教室はすべて人文棟1階に位置しています。

### 7月1日(土)ホルトホール大分

会場	午前 10:30～	午後 13:30～	15:45～	18:00～
4階会議室 404, 405, 408, 410	分科会① A, B, C, D			
3階大会議室		特別セッションⅠ	シンポジウム	
1階小ホール		特別セッションⅡ		懇親会

## ■大分市までの交通について

空路では多くの皆様が大分空港をご利用になると思われま  
す。大分市内と大分空港を結ぶ交通手段は高速バスのみ  
です。所要時間は60分程度で料金は1550円(片道)に  
なります。陸路ではJRあるいは高速バスをご利用ください。  
関西圏からは新幹線と特急ソニックを利用されると便利で  
す。空路・陸路ともに大分駅に到着しますので、宿泊は駅  
近辺の宿を予約されると会場移動も含めて便利になります。

## ■宿泊について

ホルトホール大分、大分県立芸術文化短期大学ともに  
最寄りJR大分駅になります。大分駅近辺(徒歩5分以  
内)の宿泊施設は県内全域へのアクセスの良さもあり近年  
予約をとりにくい状況が続いています。近隣の観光地である  
別府市は大分駅まで電車で10分ほどに位置していますの  
で、宿泊地としても検討いただけます。ただし、関東・関  
西と異なり列車の運行本数が少ないため、会場までの移動  
については時刻表の確認をお願いします。

## ■参加費等

- ・参加費 事前申し込み  
会員 2000円、非会員 4000円  
学部生 2000円(学生証をお持ち下さい)
- ・参加費 当日受付  
会員 3000円、非会員 5000円  
学部生 2000円(学生証をお持ち下さい)

※ 前年度会費未納の会員は、事前申し込みは不可  
当日受付のみで参加費は4000円

※ 文化経済学会<日本>をより多くの方々を知っていた  
くために非会員は、シンポジウム、特別セッションの  
みであれば参加無料、エクスカーションも各コースの規  
定参加費で申込可

- ・懇親会費 5000円(ホルトホール大分 1階小ホール)
- ・大会昼食ならびに昼食弁当

7月1日(土)につきましては、ホルトホール大分近  
隣の飲食店をご利用ください。また、大分駅、ホルトホー  
ル大分近辺の昼食可能な場所については学会当日に簡  
単な資料を皆様に配布する予定です。そちらもご参照く  
ださい。

7月2日(日)のお弁当のみ、事前申し込みが必要です。  
1食1000円(飲み物付)。  
参加申し込みをされる際、あわせてお申込みください。

- ・7月2日(日) 空港直行バス

大会2日目終了日時が日曜日の夕方にあたるため、通常  
ビジネス客も含め空港行きバスの混雑が予想されます。今  
回、大分空港利用の皆様のために、大分県立芸術文化短  
期大学から空港までの特別直行バスを準備いたしました。  
空港を利用される会員の皆様は大学からの直行バスの利  
用をおすすめします(1便夕方のみ)。

7月2日(日)

大分県立芸術文化短期大学→大分空港直行バス

運行時間 出発時刻 15:40

到着時刻 17:00(予定)

運賃:1500円(おひとり)

## ■エクスカーション企画 <6月30日(金)>

今大会において、大分県内の芸術文化事業の取組状況  
を4つのコースに分かれてご案内いたします。どのコースも  
定員が設定されています。お早めの申込をお願いします。

### エクスカーション1「大分まちなかアート散策」

参加費:1000円(飲物代別)

大分市中心市街地に点在する屋外彫刻や大分アート界の  
歴史スポットを巡りながら大分県立美術館 OPAM をめざす、  
大分アートの今と昔をコンパクトに詰めた街歩きツアーです。

### エクスカーション2「別府アートめぐり NPO 法人 BEPPU PROJECT の歩み」

参加費:1000円

別府市内の芸術文化事業を巡る街歩きツアーです。案  
内役には、別府で2005年より活動を展開するNPO 法  
人 BEPPU PROJECT スタッフの利光友紀が担当します。  
別府市内における芸術文化事業を手掛けてきた BEPPU  
PROJECT の歩みを巡っていきます。

### エクスカーション3「バスとトレッキングで巡る国東芸術のま ちづくり交流ツアー」

国東市活力創生課の協力により実現した特別バスツアー  
です。六郷満山文化で知られる国東半島エリアをアート作  
品とともに巡っていきます。独自の仏教文化が開いた地  
で、国東の文化と芸術への造詣を深めていただきます。集  
合場所は大分空港、帰着地は大会開催地至近の大分駅で  
す(見学先は天候等の都合で変更になることがあります)。

#### エクスカージョン 4 「創造都市たけたを巡るエクスカージョン バスツアー」

竹田市は芸術文化を起点とした移住定住促進事業の先進的事例としても注目されています。2015 年度には、文化庁長官表彰の被表彰都市（文化芸術創造都市部門）に選定され、今回のツアーでは、受賞理由となったインキュベーション型工房 TSG（竹田総合学院）、城下町地域事業を中心に、竹田市の事業担当者とともに巡っていきます。

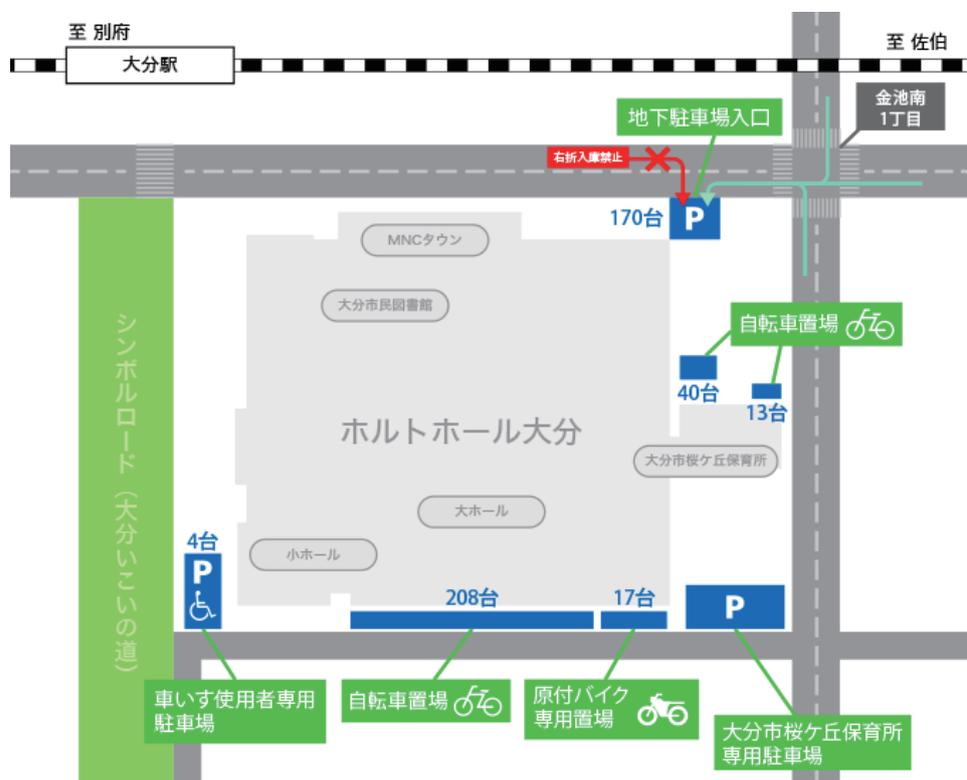
※各エクスカージョンの詳細な訪問先につきましては、文化経済学会＜日本＞公式ホームページにてエクスカージョンの紹介チラシ（PDF）を御覧ください。

<http://www.jace.gr.jp/pdf/tour20170630.pdf>

- 申込方法：オンラインでの大会参加の申し込みと同時に、ご希望のコース（コース1・2・3・4）にチェックを入れてお申込みください。なお、エクスカージョンの参加費だけは当日、現地でお支払いください。
- 参加申し込み：5月19日（金）～6月19日（月）18:00 締め切り  
学会ホームページよりオンライン、もしくはFAX・郵送にて受付予定
- 募集定員：両コースとも10～15名を目安としています。  
※キャンセルの場合は、当日連絡先（参加者に連絡します）までご連絡下さい。  
※申込み多数の場合ご参加いただけない場合がありますので、お早めにお申込み下さい。
- 問い合わせ先：現地事務局 山口 祥平（大分県立芸術文化短期大学）  
携帯：080-7049-5366 大学研究室：097-545-4602（直通）097-545-0452（代表）  
Mail：yamaguchi@oita-pjc.ac.jp

### 研究大会 会場案内

#### ■ホルトホール大分



## 研究大会 会場案内



### ■大分県立芸術文化短期大学



〒 870-0833 大分県大分市上野丘東1番11号

・徒歩

JR大分駅上野の森口(南口)から約20分

・大分バス

JR大分駅府内中央口(北口)「大分駅前」3番乗り場、または「中央通り トキハ会館入口」3番乗り場から「上野」行きに乗車(約6分) 終点「上野」下車(徒歩約4分)

・本数が少ないので事前に時刻表を確認してください。

# 文化経済学会<日本> 2017年度研究大会分科会 プログラム

分科会① 7月1日(土) 10:30~12:15

## ①-A 伝統文化・芸能

座長 高島 知佐子(静岡文化芸術大学)

論題	茶道の文化経済学
発表者	太田 直希(同志社大学大学院)
討論者	高島 知佐子(静岡文化芸術大学)
論題	The System of Kagai Performance -with special reference to Kamishichiken, Kyoto city-
発表者	中原 逸郎(京都楓錦会)
討論者	高島 知佐子(静岡文化芸術大学)
論題	本邦伝統芸能の国際ブランド確立プロセスの研究:太鼓集団鼓童の事例
発表者	佐藤 敦子(高崎経済大学)
討論者	宮崎 刀史紀((公財)京都市音楽芸術文化振興財団)

## ①-B 文化産業・クリエイティブ産業

座長 川崎 賢一(駒澤大学)

論題	日本のアニメーション産業における労働・制作環境悪化とその対処戦略—分業と立地の観点から
発表者	半澤 誠司(明治学院大学)
討論者	増淵 敏之(法政大学)
論題	新分野の芸術における価値創造の形成過程 わが国のメディアアートを例として
発表者	岡田 智博(一般社団法人クリエイティブクラスター)
討論者	杉浦 幹男(新潟アーツカウンシル)
論題	ココナッツ・イノベーション・フレームワーク:現地の文化に根ざしたリソースを活用したイノベーション・フレームワーク
発表者	徳久 悟(山口大学)
討論者	川崎 賢一(駒澤大学)

## ①-C 文化政策

座長 小林 真理(東京大学)

論題	神奈川県・横浜市・川崎市の文化政策、指定管理者制度及びコンサートホールの事業評価についての比較・検証
発表者	宮地 宏征(独立行政法人都市再生機構)
討論者	小林 真理(東京大学)
論題	公設民営方式による映画館運営の課題—富山市フォルツァ総曲輪の事例
発表者	土田 環(早稲田大学)
討論者	草加 叔也((有)空間創造研究所)
論題	大阪の音楽文化の特色—オーケストラと合唱との関わりを軸に
発表者	本田 洋一(大阪市立大学)
討論者	片山 泰輔(静岡文化芸術大学)

## ①-D まちづくり・地域再生①

座長 友岡 邦之(高崎経済大学)

論題	趣味縁の系譜～ハーフシフトを可能にする個人と社会の結節点～
発表者	加藤 康子(北海道大学大学院)
討論者	友岡 邦之(高崎経済大学)

論題	まちを言祝い、まちづくりを楽しむ〈文脈〉〈矜持〉〈紐帯〉 地域固有の文化資源を生かした創造的地域再生の効果と課題
発表者	藤原 惠洋(九州大学)
討論者	八木 匡(同志社大学)

## 分科会② 7月2日(日) 10:00～12:20

### ②-A 観光・景観・地域

座長 古池 嘉和(名古屋学院大学)

論題	開発事業に伴う歴史的景観保全のための一試論ー群馬県藤岡市神田古墳群を事例としてー
発表者	土屋 正臣(群馬県藤岡市役所)
討論者	藤原 惠洋(九州大学)

論題	地方都市のまちづくりと地方創生ー延岡市の事例を中心にー
発表者	松下 愛(久留米大学)
討論者	藤原 惠洋(九州大学)

論題	郷土菓子による地域振興:『食と農の景勝地』などを手がかりに
発表者	森崎 美穂子(大阪市立大学大学院)
討論者	古賀 弥生(活水女子大学)

論題	文化観光の経済分析ーその現状と政策へのインプリケーションー
発表者	後藤 和子(摂南大学)
討論者	古池 嘉和(名古屋学院大学)

### ②-B スポーツ

座長 片山 泰輔(静岡文化芸術大学)

論題	社会的価値を担保するスポーツ放送の考察～政策アクターの視点から～
発表者	小林 壘(同志社大学大学院)
共同発表者	横山 勝彦(同志社大学)
討論者	増淵 敏之(法政大学)

論題	地域におけるスポーツ政策と文化政策の融合に関する一考察 ～愛知県刈谷市総合型地域スポーツクラブを事例として～
発表者	内藤 正和(愛知学院大学)
共同発表者	横山 勝彦(同志社大学)
討論者	八木 匡(同志社大学)

論題	アーティスティック・スポーツプロダクトから文化芸術市場への〈転送〉現象の考察:フィギュアスケート鑑賞者の消費行動分析を主軸として
発表者	町田 樹(早稲田大学大学院)
討論者	片山 泰輔(静岡文化芸術大学)

論題	子どもの放課後の「居場所」を創出するスポーツNPOー民間資金の活用を視点にー
発表者	米村 真悟(同志社大学大学院)
共同発表者	横山 勝彦(同志社大学)
討論者	友岡 邦之(高崎経済大学)

## ②-C 文化統計・計量分析

座長 阪本 崇(京都橘大学)

論題	わが国のゲーム・アニメと文化的活動間の相関分析 ～ bivariate ordered probit model の適用～
発表者	仲村 敏隆(早稲田大学大学院)
討論者	勝浦 正樹(名城大学)
論題	The Relationship between Income Inequality and Consumption of Art and Culture: Evidence from Japan(所得格差と芸術文化の消費:日本のデータによる分析)
発表者	谷口 みゆき(慶應義塾大学)
討論者	有馬 昌宏(兵庫県立大学)
論題	ThrosbyとWithersの文化芸術の肯定的外部効果認識に関する質問項目の尺度化への試みと示唆点の探索
発表者	柳 永珍(福岡大学)
討論者	阪本 崇(京都橘大学)
論題	学生は読書をしなくなったのか? 過去4回の学生調査から
発表者	有馬 昌宏(兵庫県立大学)
討論者	牧 和生(青山学院大学)

## ②-D アートプロジェクト

座長 河島 伸子(同志社大学)

論題	アートプロジェクトにおけるアートボランティアの役割 他分野のボランティアとの比較研究から
発表者	藤原 旅人(九州大学大学院)
討論者	吉本 光宏((株)ニッセイ基礎研究所)
論題	国際展はソーシャルキャピタル形成に寄与するのか—あいちトリエンナーレ2010・2013と2016の比較—
発表者	吉田 隆之(大阪市立大学大学院)
討論者	澤村 明(新潟大学)
論題	障害者の芸術表現と“労働”との関係についての検討
発表者	川井田 祥子(鳥取大学)
討論者	熊倉 純子(東京藝術大学)
論題	芸術家と地域社会の共創に関する研究 —教育・福祉・コミュニティー—
発表者	谷口 文保(神戸芸術工科大学)
討論者	河島 伸子(同志社大学)

## 分科会③ 7月2日(日) 14:10～15:20

### ③-A コミュニティ

座長 野田 邦弘(鳥取大学)

論題	地域固有の文化情報資源に対する活用モデルの考察 —アーカイブ化、オープン化、プラットフォーム化の比較を通して—
発表者	佐藤 忠文(九州大学大学院)
討論者	増淵 敏之(法政大学)
論題	東日本大震災被災地域と映画上映 —岩手県沿岸部と宮城県石巻市の事例から—
発表者	石垣 尚志(東海大学)
討論者	野田 邦弘(鳥取大学)

### ③-B まちづくり・地域再生②

座長 吉本 光宏((株)ニッセイ基礎研究所)

論題	地方都市における創造人材の受容と活用～大分県竹田市および大分県内の事例より～
発表者	澤田 知美(竹田アートカルチャー実行委員会)
討論者	古賀 弥生(活水女子大学)

論題	地域広域芸術祭における住民小学生への影響 —「瀬戸内国際芸術祭」を事例として—
発表者	山本 暁美(東京大学大学院)
討論者	熊倉 純子(東京藝術大学)

### ③-C 理論・思想

座長 後藤 和子(摂南大学)

論題	19世紀イギリスの価値論における力と性質の扱われ方について
発表者	橘高 彫斗(大阪大学大学院)
討論者	後藤 和子(摂南大学)

論題	「文化・アートの4種の市場」という概念の有効性について
発表者	皆田 修司(跡見学園女子大学)
討論者	中尾 知彦(慶應義塾大学)

(演題タイトルは変更される場合がございますので、ご了承ください)

2017年  
12月9日  
(土)

2017年度秋の講演会は、大阪で開催されます

## 2017年度秋の講演会 開催日程等のご案内

テーマ：「ロボティクス&都市デザイン」

### 開催日程等のご案内

開催地： 常翔学園梅田タワー（大阪府大阪市北区茶屋町 50 番 大阪工業大学 梅田キャンパス）

<https://www.oit.ac.jp/rd/umeda/index.html>

日程： 2017年12月9日（土）午後

テーマ： ロボティクス&都市デザイン

共催： 摂南大学経済学部

2017年秋の講演会は、近年、ビジネスと商業が融合しクリエイティブな雰囲気を漂わせる大阪梅田で開催します。

日程は12月9日（土）、会場は、2017年春に茶屋町にオープンした常翔学園梅田タワーです。

担当は、摂南大学です。常翔学園は、大阪工業大学、摂南大学、広島国際大学が所属する学園です。この梅田タワーには、大阪工業大学のロボティクス&デザイン工学部が入ります。それにちなみ、秋のシンポジウムのテーマも「ロボティクス&都市デザイン」を予定しています。

空間と経済は、密接な関係にあります。製造業の跡地をアートで再生する試みは2000年代以降続けられています。さらに、人口減少による空き家問題が喫緊の課題となっています。これらは、空間と経済の陰の課題です。他方、企業が集積し魅力的な空間に変貌を遂げつつある梅田境界は、空間と経済の光の部分です。梅田の少し先には、堂島米会所（世界初の先物取引ともいわれる）のあった堂島や、近代建築が集積する中之島があります。この境界では、近代建築を生かした都市の再開発が行われ、新しいビジネスの拠点となっています。そこに、AI やロボティクスが加わると、どのような変化がおこるのか、多彩な専門家にご登壇いただき、ロボティクス×スペースデザイン×経済について、縦横無尽に議論していただきます。

パネリストは、大阪市北加賀屋の名村造船所跡地をクリエイティブセンター大阪として再生し、まちの再生に取り組む千島土地株式会社社長の芝川能一氏や、千葉県佐原の町並み再生プロジェクトで日本建築学会賞業績部門を受賞した郡裕美氏（大阪工業大学教授）、ロボティクスの研究者（交渉中）を予定しています。モデレーターは、後藤和子です。

ぜひ、多くの会員や大学院生、学生さんたちに参加していただきたいと思います。シンポジウム終了後には懇親会も計画しています。

<文責・摂南大学経済学部・後藤和子>



# 私の文化経済学履歴書



## 私の文化経済学履歴書

京都橋大学現代ビジネス学部

阪本 崇

私が初めて文化経済学という学問に出会ったのは、学部2年生のときに、池上惇先生の『文化経済学のすすめ』を手にしたところである。とはいえ、学部生の間は文化経済学に対して特に関心をもつことはなかった。当時、本学会の設立や『舞台芸術』の翻訳に取り組まれていたはずの池上先生のゼミに所属してはいたものの、ゼミを選択した理由は、テキストに指定されていたガルブレイスの『経済学の歴史』に興味を持ったからであり、また、私にとって池上先生はあくまでも財政学の先生であった。

文化経済学との接点が広がりはじめたのは、大学院に進学してからである。前年に進学されていた後藤和子先生や金武創先生の研究を身近に聞くことができたし、ちょうど京都で開催された研究大会にも参加した。また、当時、池上先生と山田浩之先生を中心に活動していた関西支部の事務局にも関わったし、その延長で国際学会に参加し、スロスビー、ピーコック、ガルブレイス、ポーモルなどの講演を聴く機会を得ることもできた。それでも、私の研究上の関心は公共選択論を中心とする財政学であり、テクニカルな部分では、ゲーム理論を含むマイクロ経済学への関心が強かった。

そんな私の関心が少しずつ文化経済学へと向かいはじめたのは、修士論文のテーマとして教育財政を選んだときからである。家計支出に占める教育費の割合の上昇を説明するひとつの切り口として、ポーモルの「コスト病」は最適であったし、文化と教育には経済学的な視点から公的支援を根拠づけることが必ずしも容易ではないという共通点があったからである。言い換えれば、私の文化経済学への関心は、文化への直接的な関心からではなく、自分の研究テーマである教育財政に有益な視座を与えてくれる経済学の一分野への関心から生じたものであったのである。

本学会での私の最初の研究報告(1997年・長岡大会)も、こうした関心を背景とするものであった。この報告には、ベッカーとスティグラーが展開した家計生産モデルとT. シトフス

キーが *The Joyless Economy* で論じた人間の満足の源泉に関する議論から、選好の変化が文化に関わる消費行動に及ぼす影響を明らかにすることで、文化に対する公的支援の根拠を改めて考え直そうとの意図があった。おそらく本学会の報告の中では異色なものであったと思うが、座長を務められていた端信行先生に激励をいただき、勇気づけられたことを覚えている。その後、中谷武雄先生が中心になって進められたスロスビーの翻訳や、金武先生が企画された『文化経済論』の執筆に携わることになったが、その間も、私の関心の中心は個人の選好以外に公的支援の根拠を見つけることにあった。

しかし、そうしているうちに研究の方向性を変えるきっかけとなる出来事があった。ある会合で「コスト病」を基礎に教育費が高騰するのは必然的であると説明したことが、教育関係者に一種の驚きを持って受け取られたことである。出席者の多くは、むしろその原因を自分たちの努力不足と思いついており、一種の罪悪感をもっているように感じられた。そのとき以来、公的支援の新しい根拠を見つけ出すよりも、教育、文化、福祉、医療といった活動のコストが高くなっていくことは必然的なことであり、かつ、そうしたサービスに資源を移転してゆくことは決して不可能ではないことを丁寧に説明してゆくことのほうが重要ではないかと考えるようになった。もちろん、資源の移転を正当化するためには根拠が必要であるから、その研究をやめるつもりはない。しかし、しばらくは「コスト病」の社会的意義についての研究に専念していきたいと考えている。

このように振り返ってみると、私の文化経済学への関心は邪道なものであったように思えてならない。しかし、経済理論の拡張も文化経済学の貢献のひとつであるというM. ハターの言葉を信じて、今後も研究を続けてゆこうと考えている。

## 私の文化経済学履歴書

思春期からドイツの思想と芸術に関心を持ってきました。小学校高学年の頃、ベートーヴェンの音楽と偶然に出会ったことが決定的でした。それ以来、楽聖が生まれ活躍した時代のドイツとはどんな社会だったのだろうか、という興味がわき上がってきました。200年以上前のヨーロッパ、フランス革命によって近代市民社会が誕生する激動の時代。ベートーヴェンの音楽に没頭しながら、ドイツの社会や文化のことをあれこれ想像し、哲学書や文学書を読みあさりました。音楽を通じて何かを感じる、つまり心を震わせる根本的な経験が出発点でした。そこから、知的な好奇心が次々とわき起こってきたのです。

他方、職住一体の商人の環境で育ちながら、日本の文化と社会に違和感を抱き、自然の中での孤独を友としてきました。1960年代からの高度経済成長、そしてバブル景気を通して、イベントとしての文化事業が全国に広がり、文化は一過性の華やかな消費財となっていきました。1970年の大阪万博が大きな転機でした。しかしどれも画一的な一過性のイベントに終始し、お祭りのあとには何も残りませんでした。大手の広告代理店が博覧会やイベントを華々しくプロデュースしていましたが、各地域の市民や住民が主体的に参加する余地はありませんでした。市民もまたクライアントとして、華やかな文化のおとなしい消費者に留まっていたのです。

バブル崩壊以降の1990年代、イベント文化やハコモノ行政の弊害が全国各地で一気に表面化しました。それまでは哲学や美学、さらに音楽作品を勉強していました。しかし、芸術の研究は残っても、生きた芸術そのものの存続が不可能になってしまうなら、何のための研究なのだろうか。芸術文化の研究とは、結局造花を分析すること、つまり死に絶えた作品を研究することになるのではないかと、という根本的な矛盾を抱くようになりました。

自治体財政難や少子高齢化が進行する中で、芸術文化の持続可能な発展が危ぶまれる状況を、どうにかして変えなければならない。文化政策に関心をもち、アートマネジメントの現場に関わるようになった根本動機は、このような危機感からでした。2000年頃から神戸大学が中心となり、産・官・学・民の連携による新しいアートマネジメントにチャレンジしてきました。今年で12年目を迎える神戸国際芸術祭も、その試みの一つです。質の高い芸術を創造し、発信

し、享受するためには、長期的な展望に立った持続可能な仕組みが求められます。そのためには、従来の市場経済や消費文化とは異なる価値観と方法を模索しなければならない。思えば向こう見ずな挑戦でした。

日本中の、いや世界中の政治家や様々な分野のリーダーが、いまや理性的な判断能力を奪われています。「思考停止社会」の全面化です。しかし、そもそも人間の理性が麻痺しているのでしょうか。いや理性そのものが無力になってしまったわけではない。理性が正しく働くために必要なアンテナ、理性の働きの前提となるセンサー、つまり「感性的なもの」が、いつのまにか曇らされ、錆び付き、麻痺してしまっただけではないか。生きている自然と人間、そして様々な社会の出来事と直接ふれあい、感じとり、心を通わせあうための通路が閉ざされてしまったのではないかと。情報の洪水の中にもかかわらず、いつしか私たちは本当の自然を、本当の世界を、本当の美を、本当の自分を見出すことができなくなってしまったのです。

いま最も大切なことは何でしょうか。ひとりひとりの感覚を広く、遠くへ、しなやかに開くこと。そこに見出される繊細な違い、人間や自然が生きていることの多様なあり方を、生き生きと受容する心を取り戻すことでしょうか。このような誰にとっても共通する感性、つまり「共通感覚」を再び目覚めさせることによってしか、世界の仕組みを根本的にくみかえる道はない。ですから、感性による知覚と想像力を刺激し、魂に活気を与えてくれる芸術の力こそが、現代社会に最も必要不可欠なものであると思うのです。

高校生の頃に深く共感した若きマルクスの思想が、暗黙の指針となってきたのかもしれない。「人間的感覚、感覚の人間性もまた、その対象の現存在によって、人間化された自然によって、はじめて生成する。五感の形成は、これまでの全世界史の労働である」(『経済学・哲学草稿』藤野渉訳)。

五感の形成を「疎外された労働」によって妨げられないようにすること。すなわち、芸術文化との深く濃密な関わり方ができるような環境を整えること。門前の小僧の身から僭越ではありますが、「文化経済学」はこのような目的へと方向付けられるべきではないかと、ますます強く感じています。

## 学会誌「文化経済学」編集委員会より

### 1. 論文の投稿について

「文化経済学」は、年2回発行され、年2回の区切りで投稿論文を受け付けています。

	第15巻第1号 (通巻第44号)	第15巻第2号 (通巻第45号)
論文提出締切り	2017年9月末	2018年3月末

#### <投稿・査読手続きがオンライン化されました！>

第14巻第2号（2017年3月末投稿締切、同年9月末刊行予定）より、投稿および査読手続きがオンライン化されました。これにより、論文の投稿から査読結果通知に至るまでの一連の手続きはすべて、ガリレオ社の提供するオンラインシステムにより行われます（認証にはSOLTI会員情報システムで利用している会員番号とパスワードが必要です）。

これに伴い、従来、毎年1月末と7月末までに要請しておりました「応募意思表明（エントリー）」の手続きが廃止となり、オンラインシステムでの論文投稿手続きに一本化されました。今後は3月末と9月末までに学会ホームページよりオンラインでご投稿いただいた原稿を編集委員会が受理し、オンラインで査読の依頼から査読者による判定結果報告、投稿者への結果通知までの作業を行ってまいります。

#### <投稿・掲載条件>

論文の投稿は本学会員に限られます。学会費が未納の方は論文の投稿をすることはできません。掲載には、査読委員の審査を経て掲載が妥当と認められること、掲載料をお支払いいただくことが条件となっています。（2ページ毎に6,000円、ただし、50部の抜き刷りを配布いたします。なお、金額は今後、改定の可能性もございます。）

#### <投稿方法>

執筆要項に則って作成した原稿の電子ファイルを「**オンライン投稿査読システム**」へログインの上、アップロードしてください。（この際、必要な投稿情報についてご入力ください）。

オンライン投稿・査読システムへは、学会ホームページの「論文募集」ページ下部にある「**オンライン投稿はこちら**」のリンクからお進みください。

文化経済学会<日本>「論文募集」ページ：<http://www.jace.gr.jp/bosyu.html>

#### <投稿にあたっての留意事項>

- ・過去の研究への言及と、従来の研究の流れの中での自己の研究の位置づけ、または独自性が明確になっていること。
- ・論証や実証に必要な文献・資料の参照が行われていること。
- ・歴史的事実等については、事実が正確であるかどうかの確認を行っていること。
- ・応募する論文は未公表のものであること。また、他の学術誌等への投稿の予定がないものに限る。
- ・英文要旨については必ずネイティブ・チェックを受けること。
- ・提出方法・原稿の形式などの詳細は、学会ホームページの「論文募集」ページを必ず参照のこと。

### 2. 学会誌における書評について

学会誌の書評で取り上げて欲しい本がありましたら、メールにて書名をお知らせください（宛先：[ktomooka@tcue.ac.jp](mailto:ktomooka@tcue.ac.jp)）。また、書評のための献本をしていただける場合は、友岡邦之編集長まで送付をお願いいたします（宛先：〒370-0801 高崎市上並榎町1300 高崎経済大学地域政策学部 友岡邦之宛。なお、事務局宛の献本は受け付けておりませんので、ご注意ください）。その後編集委員会で検討し、取り上げるべき本と判断されれば、評者を選定の上、学会誌に書評を掲載します。

## 理事会報告

### 文化経済学会<日本>第13期第4回理事会

日時：2017年3月29日（木）16:00-18:00

場所：法政大学新一口坂校舎 3階 305

出席者：勝浦会長、八木副会長、増淵理事長、片山、勝又、  
後藤、野田、阪本、友岡、古賀、牧、各理事  
：11名

委任状提出者（理事）：14名

欠席者：2名（監事）

#### <第1号議案> 会員の入退会について

入会申込者5名について報告があり、承認された。

退会申込者7名について退会が承認された。

#### <第2号議案> 2016年度事業報告について

増淵理事長より、事業報告がまとまったことが報告された。

#### <第3号議案> 2017年度事業計画について

増淵理事長より、事業計画がまとまったことが報告された。

#### <第4号議案> 2017年度研究大会（大分）について

##### (1) 実行委員会からの報告

古賀担当理事より、研究大会の実施計画書（案）をもとに、大会プログラム、シンポジウム、特別セッション、エクスカージョン企画についての報告が行われた。

##### (2) プログラム委員会からの報告

片山理事より、分科会の座長、発表者、討論者案の報告があり、協議の結果、一部の分科会座長・討論者の修正を含めて原案が承認された。さらに資料のとおり芸団協から「公共劇場の就労環境改善を考える」という特別セッションの開催の提案があり、協議の結果、分科会③の枠を使い、「会員企画セッション」として実施することを承認した。

##### (3) 大会優秀発表賞の選考委員会の構成等

増淵理事長より、12名のエントリーがあるという報告があった。

#### <第5号議案> 2017年度秋の講演会（大阪）について

後藤理事より、学校法人常翔学園大阪工業大学梅田キャンパスを会場に、「ロボティクス&都市デザイン」をテーマとする開催案が報告された。12月9日を開催日とし、案にもとづいて開催を進めるとの報告があった。

#### <第6号議案> 2018年度研究大会・秋の講演会について

増淵理事長より、2018年度研究大会について、7月14日（土）・15日（日）に同志社大学を会場に開催する予定との報告があった。さらに、同年度秋の講演会については、東京都市大学を会場に開催する予定との報告があった。

#### <第7号議案> 理事任期の変更に伴う会則の改正について

勝浦会長より、理事会制度の改革について報告があり、承認され、次回の理事会に諮ることになった。主な変更点は理事・監事任期の改正（連続して4期務めることができない）、特別理事（会長経験者）の創設である。

#### <第8号議案> 会員情報システムの機能変更について

事務局より、年会費に関する見積書・請求書・納品書・領収書のオンライン化が開始されたという報告があった。

#### <第9号議案> 委員会報告

##### (1) 編集委員会

友岡担当理事より資料のとおり次の報告があった。

- ・第13巻第2号における誤記への対応
- ・オンライン投稿査読システムの開始
- ・投稿状況について
- ・電子ジャーナル化について
- ・編集委員の確保と任期について

##### (2) ニュースレター

増淵理事長より、ニュースレター96号が発行されたという報告があった。

##### (3) 広報委員会（パンフレット及びSNSについて）

牧担当理事より、資料のとおりFacebookページを用いた広報活動について報告され、協議の結果承認された。早期に運用を開始することとなり、2017年度研究大会（大分）の告知に活用することとなった。パンフレットについて次回理事会において審議したいという報告があった。

#### <第10号議案> その他

##### ・会費納入の際のオンライン化について

事務局から郵便局からの振り込み以外に、銀行からも振り込みが可能であり、銀行からの（ネットバンキングによる）振り込みはその口座番号をHPにも掲載し周知するという報告があった。

・NPO世界劇場会議名古屋より、「世界劇場会議名古屋フォーラム2017」についての後援名義使用許可の依頼があり、承認された。

次回理事会 2017年7月1日(土)12時20分から大分  
県立芸術文化短期大学で行う。

### 入退会情報 (敬称略)

● 第13期第4回理事会 (2017.3.29) にて承認

**入会** KAKIN Oksana (お茶の水女子大学大学院)、北村  
麻菜 (独立行政法人 日本芸術文化振興会)、澤田知美 (竹  
田アートカルチャー実行委員会事務局)、津田広志 (株  
式会社コンセント)、長嶋由紀子 (共立女子大学)

**退会** 7名

季刊「文化経済学会」 No. 97

2017年6月1日発行

Print ISSN : 0918-3787

Online ISSN : 2432-6941

発行 文化経済学会<日本>

発行人 勝浦 正樹

編集人 川井田 祥子・高島 知佐子

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-1 第2ユニオンビル 4F

(株) ガリレオ 学会業務情報化センター

E-mail : g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp

URL : <http://www.jace.gr.jp/>

© 2017, Japan Association for Cultural Economics